

本能まちづくりニュース

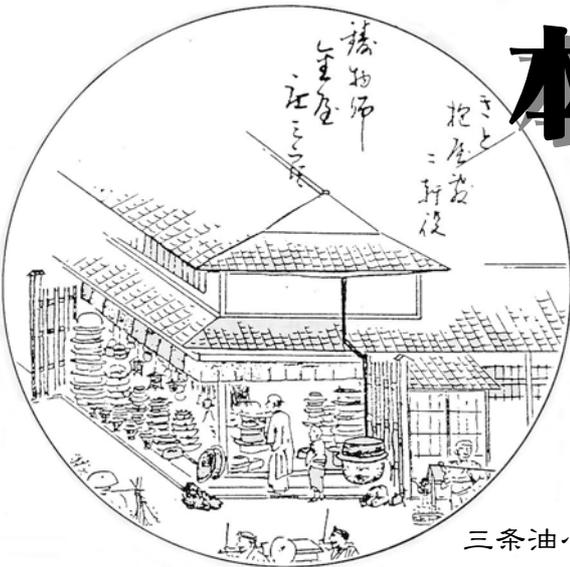
第32号 平成18年4月25日発行

本能まちづくり委員会
委員長 西嶋直和

E-mail: post@honnoh.net

URL http://www.honnoh.net

本能まちづくりニュースのカラー版は、ホームページでご覧ください。



三条油小路町絵図より鑄物師釜屋庄三郎方

本能からの発信～第3回京都まちづくり交流博～

「第3回京都まちづくり交流博」が2月17日～3月5日、「ひと・まち交流館 京都」地下一階、京都市景観・まちづくりセンターで開催されました。今回のテーマは「地域コミュニティの新しいかたち」でした。期間中、パネル展示コーナーで、まちづくりに係わる4つの団体がそれぞれの活動を紹介。中京区からは「本能ものづくり推進会議（本もの推進会議）」と「歩いて暮らせるまちづくり推進会議」が出展しました。「本能ものづくり推進会議」は、「地域のつながりを基盤にした地場産業の新しい挑戦」のテーマで、「着物」という伝統産業の発展を地域で支えていく取り組みを図やグラフを使って紹介しました。

3月14日には、本能ものづくり推進会議を囲んでの意見交流会が行われました。



～意見交流会を傍聴して～

この会は、景観・まちづくりセンターのはからいで、交流博への参加をきっかけに、「本能ものづくり推進会議」と他の活動主体が交流し、本能にコミュニティビジネスがうまれることを期待して設定されました。コーディネーターは、「京都の文化としての伝統産業と地場産業」に着目したまちづくり活動を続けておられる「京都ものづくり塾」代表滋野浩毅氏。「本能ものづくり推進会議」の方向性に対して「何を・どうやって・どこに向けて・いくらで売るか？」といったことについて問題提起されました。京都市が昨秋「伝統産業活性化条例」を制定したことに関して、「遅すぎる感じがする」「伝統産業にあぐらをかいていたのではいけない」「伝統産業だけを見ていたのではいけない、産業の伝統をどう守り育てるかを考えなければならない」「繊細な美的感覚を生かした産業発展やまちづくりに努めねばならない」「ものづくりと同時に人づくりもでき、かつトータルな消費者対応のできる工房



モデルの構築が必要」「最終的には商品として売れなければならない、消費者教育も必要だが、難しい」「生産者論理で作るだけではダメで、消費者の感性に訴えるものでなければ、買ってもらえない」等々、池坊学園の谷野理事・鎌谷教授や、大学コンソーシアム京都で「きもの学」を開講されている京都産業大学波多野教授から、厳しいご意見が出されました。本能ものづくり推進会議にとりましては、分業で成立つ京染は地域が連携してより効率的に、あたかも一つの工房となって生産を進めること・伝統に甘んじるのではなく、消費者にとってより魅力ある製品をつくり、購買意欲を高めること・若い人達に、この仕事につきたいと思うような魅力を示すこと等、が一層求められているように思いました。(N村)

最終日3月5日には「地域が動く、地域が変わる」と題したシンポジウムが開かれました。

～シンポジウムに参加して～

第一部は、作家森まゆみ氏の基調講演「地域に交流を生み出すしかけとは～地域雑誌『谷根干』の冒険～」『谷根干』とは、森氏が住み、子育てをしながら、東京都心の下町、谷中・根津・千駄木(略して谷根干)を歩き、普通の人視点から見て、聞いて、編集した地域雑誌で、1984年に創刊。全国のミニコミ誌のお手本となりました。



森まゆみ氏による基調講演

森氏は、「谷中学校(やなががっこう)」をたまり場に、地域の地図や記録史の出版・地域の人たちと様々なテーマで200回の町歩き・子育て中のお母さんたちとの交流・古い建物の保存と活用など、多方面にわたって地域を中心に活動されています。そしてその活動の輪から若い人たちが育ち、自分たちの町への誇りも生まれたということです。

第二部は「京都まちなか・新しいまちづくりの展開」と題してのパネルディスカッション。コーディネーターは立命館大学教授の乾亨氏、コメンテーターは森まゆみ氏。パネリストとして、高倉小学校校長・岩渕恵子氏、城巽五彩の会副会長・中村伸之氏、同志社大学大学院生・田中志敬氏、そして本能まちづくり委員会からは委員長・西嶋直和氏と中村麻子氏(柳水町)が出席しました。

京都のまちなかにマンションが林立して新しい住民が一気に増え、急速に変わりゆく状況のなか、子供たちを中心とした新旧住民の交流、小学校区を中心エリアとした学びと育ちのフィールド作り、地域の産業を活かしながらのまちづくり活動などが紹介されました。またPTA・マンション住民・学生の立場から、まちづくり活動の実態などが熱っぽく語られました。

西嶋氏からは—— 京都は古くから自治組織が発達し、とりわけ「町内会」の存在が大きい。そして「町内会」ごとに行う「地蔵盆」で人間関係は培われてきた。そういう京都の風土をご理解いただき、新しく来られた方、マンションにお住まいの方々にも是非「町内会」に入っていたきたい、とのこと

でした。

「京都の古いしきたりや旧住民の考え方が新しい住民との交流を阻んでいるのでは？」という意見に対して西嶋氏は「正直言って、古い体質は本能にもある。しかしそれをイエスかノーかで言い切るのではなく、アバウトに考えるのも大切ではないか」とこたえました。

「子育て世代の女性が忙しくて(働いている女性も多く)、まちづくりへの活動参加が無理な状況にあり、学生も社会学専攻者か、よほど興味を持つものでないと活動には参加する機会もない」という意見に、森まゆみ氏は、「子育て世代はPTAの役もあるし、出来る範囲内で、無理のない活動を」とおっしゃり、西嶋委員長は、「学生さんが4年間ここに住んで、ここを第二のふるさとと思ってもらえる様なまちにしたい」と述べました。また、マンション住民との交流については、「管理組合」・「マンション自治会」・「町内会(隣組)」・「自治連合会」等住民組織の内容の共通認識が必要であるという意見が中村麻子氏から出されました。



最後にコーディネーターの乾氏が、京都まちなかのまちづくり組織は「地縁」と「志縁」を兼ね備え、それを支える行政があるというまさに新しい仕組みである、と締めくくられました。

終了予定時刻を過ぎても、会場からは質問や意見が交わされ、まさに「まちづくり」は課題と問題提起を常に抱えているという印象を受けました。120名余りの参加者は、3時間20分に及ぶシンポジウムで変わりゆく「まち」と「まちづくり」に新たな思いを巡らせたことでしょう。(ゆ)

春爛漫、本能の技をあじわう

去る3月21日京都市「伝統産業の日」に、本能まちづくり委員会は「本ものに出会える日～おいでやす染のまち本能～」を開催しました。本能ホールで、[家紋糊置]中野さん・[家紋洗いシミ抜き]安藤さん・[家紋上絵]鹿島さん・[京縫刺繍]片岡さん・[模様糊置]福本さん・[創作作家(図案下絵)]高岡さん・[組紐]野垣さん・[裃仕立]多田さん・[京野菜細工]岡田さん達9人の実演、自治会館1階会議室では今井さんと園さんの指導による絞り染め帯揚げ制作体験教室、1階和室でマイキモノプロデュース、本能之辻子では八坂婦人会による甘酒の接待、を行いました。あわせて池

坊本能クラブの花展(主催五条少年補導本能支部 問い合わせ先：神谷 221-5190)が開かれました。

好天にも恵まれ、来訪者は400名近く、恒例の公開工房見学ツアー参加者は25組172名。着物姿も回を重ねるごとに増え、会場は華やいだ雰囲気でした。



特養のスタッフも着物姿



大盛況マイキモノプロデュース



着物姿で華やぐ本能ホール



金屏風を背に池坊本能クラブの花展



絞り染め帯揚げ制作体験教室

公開工房ツアー報告

藤西町 奥村直己 (29歳)

私は、この日、午前10時から午後5時まで学区内にある工房を見学する公開工房ツアーの案内人をつとめました。今回ツアーにご協力いただいた公開工房は勝山引染(引染)(三文字町)、中東盛染工(型染め)(三文字町)、金彩荒木(金彩加工)(六角油小路町)、村田縫紋(縫紋)(三条油小路町)、上木友禅(彩色友禅)(越後町)、伊藤(手作掛軸)(元本能寺南町)の6軒でした。

「勝山引染」では、縦長の作業場に張られた生地に刷毛を引いて色をつけていく引染作業が行われていました。錦小路通に面した玄関先は普通の家屋と同じ間口なのですが、入り口を抜けると、路地が深く奥に延びていて、突き当りの階段をあがった2階が作業場になっていました。

その日は蹴鞠をするときに履く袴の生地に色付作業が行われていました。生地は植物繊維(苧麻)から織られる越後上布と同じように、吉野の葛の繊維から作られた布地に、海草を原料とした染料で染められていました。布地を張るために長い布の合い間に伸子(しんし、生地を伸ばすため



の道具) が付けられており、刷毛が直接当たっても外れない伸子によって、軽快に地色がつけられていく様に参加者は感動をしていました。

作業場にはエアコンなどなく、冬は寒く、夏は蒸し暑い中で作業をされるそうです。作業場内の湿度によって引染した際の染料の乾く時間が異なるそうですが、色むらを出さずに染めるところは技の見せ所でしょう。

「勝山引染」のすぐ横の「中東盛染工」も公開工房ツアーの訪問先です。中東さんの工房も勝山さんと同じく、錦小路通から見ると普通の家屋ですが、間口のちょっと左に奥へと伸びる路地があり、そこを進んで階段を登ると縦長の工房がありました。中東盛染工では、型紙を使って色をつけていく型染めが行われていました。

当日は、静岡県からの注文ではっぴに使う生地に型を使って色をつけていく作業が行われていました。工房に入ると天井のラックに大きく長い



染料の調合用バケツが並ぶ

染め作業に取りかかります。木板は人の身長何倍もの長さで、とても重そうです。ラックに上げる作業は一人の人間では到底無理だと思うのですが、中東さんはてこを利用してうまく板をラックへ上げていました。

「中東盛染工」ではオリジナルの型のデザインを持っており、オーダーに応じて型染めをされています。インターネット上にホームページを立ち



窓際に並べられた刷毛

上げ、全国からオーダーを受け付けておられるそうです。現在は呉服問屋が集まる「室町」から着物を作るための型染めの仕事がめっきり減ったようですが、イ

ンターネットでの仕事が増えつつあるそうです。京都には全国的にもレベルの高い染織の技術があり、「織れないものはない」といわれる西陣が世界最高水準の織のテクノロジーを持っているように、本能学区にはレベルの高い染のテクノロジーが存在します。以前は「室町」からの仕事の受注が圧倒的に多かったと思いますが、インターネットによる受注は全国、さらには世界へとマーケットを広げることができます。誇りを持ちながら、しかしおごることなく染のテクノロジーをうまく使いながら新たな商品の創造を行うことができれば、本能の染業に必ず未来があると思います。

「村田縫紋」は油小路通からちょっと入った路地にありました。村田さんは家の2階で作業をし



木の板が所狭しと立て掛けられているのが見えます。型染めはこの長い木板の上に生地を張って行うのです。一反の生地が型染めされると、木板を天井のラックに上げて染料が乾燥するのを待ち、その間に次の木板をおろして、違う反物の型



ておられました。押入れには反物が積まれており、紋刺繍のできあがった反物とこれから作業される反物がありました。

紋を刺繍する際には紋の型紙を使って下絵をつけた後、その上に刺繍を施すそうです。刺繍をする際に好みの糸の太さを生み出すために、糸の撚（よ）りを解いて、適当な数の糸の繊維を束ねて口でくわえて、湿り気を与えて撚りながら糸を作られている様子は、まさに職人芸という感じでした。何とも刺繍で紋を作るとは気の遠くなるような話ですが、村田さんのお父さんが作られたという手の込んだ豪華な作品を見せていただき、参加者はその時間のかかる作業に思いを馳せていました。また「紋帳」という紋の辞典を見せていただき、参加者はその紋の数に驚くとともに、自分が生まれた地域にある紋を興味深く「紋帳」から探していました。

「金彩荒木」は油小路通沿いにあります。のれんをくぐって階段を上った 2 階が作業場になっていました。周りには荒木さんが金彩を施した作品がずらりと並べられており、ほとんど売約済みというのに驚かされました。ラジカセから流れるジャズが荒木さんのセンスの良さを示していました。



ちょうど荒木さんは、女性デザイナーの方から頼まれたというクリスマス用の着物を制作中で、緑地の生地にクリスマスツリーの金彩を施されていました。なんともモダンでメルヘン的な意匠です。

ご存知の方も多いと思いますが、荒木さんは老

舗のメーカーや呉服店から仕事を受注されており、京都御所の迎賓館にもお仕事で参加されたそうです。金彩の技術、技法は、江戸時代に始まった宮崎友禅斎による友禅染よりもずいぶん前からあったものです。昔は金彩がはがれたりすることも多々あったようですが、荒木さん自身で様々な樹脂を混ぜて、金彩耐久技術の改良研究が行われているそうです。化学会社の方とも相談しながら行われているそうですが、例えば液晶ディスプレイに使う樹脂フィルムは世界の各社が競って開発をしていることから伺えるように、樹脂は現代で最も注目され開発が進んでいる素材の一つです。時代の最先端の樹脂テクノロジーと、伝統ある匠の技を融合する仕事を荒木さんが担っているというわけです。

「上木友禅」は六角通りから路地を少し入った越後町にありました。私が子供の頃は公文の教室に通う際によく通った路地です。上木さんの作業場も玄関を入れて階段を上った 2 階にありました。

2 階の作業場はすっきりと整頓されていて、仕事のためだけにスペースをゆったりと使っているそうです。部屋の各所には反物の生地を送るロールが取り付けられており、生地を引っ張ってロールを転がしながら反物を送り、順次絵付けをしていくそうです。荒木さんの作業場にも同じような仕掛けがあったのですが、部屋の大きさや形状に応じてその部屋オリジナルの装置を自分で作られるそうです。

上木さんの周りには染料の入った小さな小皿がたくさん並べられ、デザイン画を見ることなく、



手際よく生地に彩色されていく姿に、参加していた洛陽工業高校で染織を学ぶ学生は、ただ黙って見入っていました。長年の仕事の経験から上木さんの頭の中に様々なデザインが入っていて、注文を出す問屋からこのような感じで描いて欲しいと聞くだけで、後は上木さん任せだそうです。まさに職人のなせる業ですが、問屋も上木さんに依頼をした時点で、だいたい仕上がってくる商品がわかっているというところは感心します。

手作掛軸工場の伊藤さんは、本能館すぐ横の蛸



薬師通沿いにありました。入り口にカフェの案内が出ていますが、通りから見ると普通のお家です。

玄関を入るとギャラリー風にハンドメイドの掛け軸がずらりと並んでいました。奥は竹柵に囲まれた庭から明るい日差しが入っていて、大きな和風の木のテーブルがあり、その上にある茶瓶からは湯気が立っていました。テーブルの周りにはおしゃれなグラスと茶葉の入ったポットが並べられ、かすかに聞こえてくるαステーションのラジオが京都にいることを認識させてくれます。まさに和のカフェなのですが、京都の家屋の良さを現代風にうまくアレンジをしながら引き出していて、おばあちゃんの家でしか日本の家屋に触れることのできなかつた私にとって、やっぱり自分で家を建てる時は、和式の家屋だなと強く思わせられた素敵なお家でした。

手作掛軸工場では、自分で好きな布切れを使って掛け軸を作ります。つまり自分のお気に入りの生地を掛け軸にして残しておくことができるわけです。この工場では定期的に手作掛け軸の講習を行っておられるそうで、もちろん和風カフェでお茶を楽しむこともできます。

付記：奥村直己君は、現在は右京区西京極にお住まいですが、本能(藤西町)生まれの本能育ち。滋賀県立大学農業経済学専攻後、アメリカのミシガン州立大学大学院の途上国農村開発専攻修士課程に留学。4年後帰国され、2005年4月から京都織物卸商業組合事務局業務課に勤務されています。今回初めてボランティアスタッフとして参加協力してくださいました。

「何んでアメリカまで勉強しに行って、京都の織商で働いてるの？」という素朴な質問に、「今まで、途上国の農村やアメリカの貧困地帯をどのように地域(経済)開発するか、を学んできたわけですが、自分の育った地域はどうなんだろう？地域の産業はどうなんだろう？とアメリカから帰国する前から頭の中にありました。帰国後、職を探していたところ、たまたま何年かぶりに職員公募をしていた京都織商が目にとまり、うまく採用してもらうことができました。地元の産業のために少しでも何かできないかなと思って働き始めました。今は染織業界の流通部門にいますが、私は農村や農業の生産者を見てきたので、染織業界においても生産者側である本能地域やその他の染織産地に頑張っって欲しいという強い思いを持っていて、本能のまちづくりにも興味があるわけです。生産者側が直売などの新しい動きを行っていくことは良いと思われますし、それに刺激されて流通側にもやるべきことが出てきて、それぞれが新しい役割を創造し合い、そんな中で生産と流通がうまくつながって発展していけばいいなと思っています。」と答えて下さいました。

今回は紙面の都合で、公開工房見学のレポートのみを掲載しましたが、「本能のまちづくり活動と地域ネットワーク(=ソーシャル・キャピタル)との関連性」についてのお考えも頂戴しましたので、次回掲載します。本能まちづくりを進めていく上で大いに参考にすべきご意見です。次号をお楽しみに。(N村)

平成18年1月、「伝統産業の日」の一環として実施された伝統産業・まつりをテーマとして募集された、京都市小中学生、幼稚園の図画・作文コンクール「京都大好き！わたしたちのまちの宝もの」作品展において、みごと京都市長賞を受賞された郁文中学校(現3年生)椎葉真理(しいばまこと)君の作文を紹介します。伝統産業製品への熱い思いと、小学生の時に参加した「おいでやす染のまち 本能」公開工房ツアーの感動が伝わってくるようです。

「古からの贈り物」

郁文中学校二年 椎葉真理

僕にとって、伝統産業製品とは、くらしの中に生き続ける芸術であり、文化だと思う。

千年の都、京都には、時代を超えて現代に受け継がれてきた、数々の伝統やしきたりがある。それはただ単に古いとか、手間暇かかるといった「価値」ではなく、良いものだから残していかなければならないという、職人さんの思いと、使い手の思いが一つになって生まれた技の結晶だと思う。

僕は保育園の頃から能楽を楽しんできた。日本が誇る世界無形遺産としての能楽には、京都の匠の技が凝縮している。僕は特に大蔵流の狂言、茂山家の狂言が大好きだ。能楽の装束は、伝統産業製品を欠いては成り立たない。もし、伝統産業を受け継ぐ人がいなかったら、能楽を誰もが見に行きたくないかもしれないだろうし、本来のあるべき姿で演じることが出来なかったと考える。僕が狂言のおもしろさに触れることが出来たのは、京都という技術や伝統を重んじながら、新しいことに挑戦し、成長し続ける、素晴らしいまちに生まれ、育つチャンスを得たからだと思う。

僕に与えられたチャンスを、これからどう活かしていくのか。単なる偶然の恵みとして僕だけが喜ぶだけでいいのか。答えはNO。

どんなに素晴らしい技術であっても、その良さを美術館や博物館でしか鑑賞することができないのであれば、そこで文化の継承は途切れてしまう。伝統産業製品の良さを理解し、世界中の人に知ってもらうこと、使っていたことが大事だと考える。そのためには、まず僕達の世代が使い続けることが大事だと思う。使うことでその良さを実感し、僕達自身の言葉で、世界に向かって「発信」する。

単なる京都の文化を享受する者から、匠の技を継承する人達と同じ立場に立ち、古からの贈り物を、共に分かち合う者として、「伝える」ことが大事だと考える。

僕達が生きた時代の「文化の証」として、何千年も後の世代に伝えることが出来たら、僕達の思いは時を超えて、永遠に生き続ける命を得るだろう。

僕の住む下京区に隣接する中京区は、染めのまちである。僕が小学校四年生の時、「まちなかを歩く日」というイベントに参加した。織田信長が襲われた時代の本能寺があったと伝えられる、元本能小学校を拠点として、本能学区で伝統産業に従事する方の工房を見せていただくツアーに参加した。今でも忘れられないのは、金彩の荒木さんだ。一見、普通の

の民家と見受けられる荒木さんの玄関に入ると、左手の座敷が仕事場だった。織りを担当する職人さんから、荒木さんが仕事を引き継ぎ、金ばくで絵を描いていかれる。細やかな作業の積み重ねであること、ほこりを付けないうように注意を払われていることから、普段は工房を公開していないことを教えていただいた。完成した作品も見せていただいたが、帯に描かれていた北山杉の風景は、気品があり、これぞ京都の誇る伝統工芸といった重みがあった。京都の伝統産業製品のうち、染織の分野は、数多くの専門家が分業し、コーディネートされ、製品が完成する。多くの人が確かな仕事を積み重ね、より良いものに仕上げたいという思いも重ねて、一つの仕事が完成する。

発信者としての僕は、単にお金を出して買うだけでなく、製造過程を理解して、それに見合った価格であることも正確に伝えてゆかなければならない。高価だから良い物だという伝え方では、伝統産業製品の真の値打ちには伝わらないし、使っていたく動機づけにはならないと考える。何もむつかしいことではない。僕達の先祖がしてきたように、食器をはじめとして、普段から使い続けたい。何か自分にとってのイベントの時に、はりこんで買う楽しみを味わうことが出来たら、僕は幸せを共有出来ると信じている。

染のまち・本能 ～継ぐ技と心～

京都文化博物館に展示予定

京都府京都文化博物館はもうすぐ開館 20 周年を迎えるそうです。2 階常設展示コーナーの「匠の世界」において、京都の伝統技術を、固定ではなく交替で、近隣の学区に協力を願って、多方面から展示する形に変え、文化博物館が地域と身近な関係を構築していきたい。まずは、「歩いて暮らせるまちづくり推進会議」で文化博物館と協働している本能まちづくり委員会・本能ものづくり推進会議に新趣向の展示をしてもらえないか、と

いう依頼が、博物館学芸課主任学芸員南博史氏よりありました。これを受け、本もの推進会議では、本能の職人さんの仕事場の写真を撮らせてもらったり、各自秘蔵の作品・道具類を持ち寄ったりして、本能の匠の技をどんな方法で来館者に伝えるか相談し、南氏とともに展示の準備を進めています。5 月 16 日から 3 ヶ月ほど、展示品を替えながら公開することになりました。皆様、期間中に、是非足をお運び下さい。



持ち寄られた、秘蔵品・道具類の数々

自治連合会からのお知らせ

平素は本能自治連合会に御支援御協力を賜り、ありがとうございます。本年度の自治連合会の諸事業、予算のあらましをお知らせします。

本能自治連合会会長 岡山悟

平成 18 年度事業予定

8 月 19 日 (土)	本能夏まつり
9 月 18 日 (祝)	敬老会
12 月 23 日 (祝)	餅つき交流会
平成 19 年 1 月 1 日 (祝)	新年互礼会
1 月 8 日 (祝)	成人式

本能まちづくりニュースは、各種団体交付金を受け、本能まちづくり委員会から全戸配布されています。

平成 18 年度収支予算

収入

18 年度自治連合会会費	5,718,000
--------------	-----------

支出

各種団体交付金	3,310,000
事業費	1,570,000
諸経費	838,000
合計	5,718,000

予告!!

本能ものしい講座開講
平成 18 年 6 月 2 日夜
本能自治会館会議室にて

織田信長を祀ってある
建勲神社宮司松原 宏氏

ひとこと ◎「本ものに出会える日・体験コース」では、時間の経つのも忘れて、絞り染めの帯揚げ制作に没頭される皆さんのお姿に感動しました。(ゆ)
◎今年も好評のうちに、「本ものに出会える日」を開催することができました。ご協力いただいた工房の皆様、スタッフの皆様、ありがとうございました。(N村)
◎六角通油小路東入る北側の N T T 電柱に待望の防犯灯が設置されました。1 戸 1 灯運動を実施中です。門灯、玄関灯の終夜点灯にご協力願います。町が明るければ犯罪も発生し難くなります。M.O